

# 恋

渡辺温

青空文庫



\*

そこの海岸のホテルでの話です。

彼女は女優でした。少しばかり年齢をとりすぎてしまいました  
が、それでもいろいろな意味で最も評判のよい女優でした。

劇場が夏休みなので、泳ぎにたった一人で海岸へ来ていたので  
す。

ところが、ホテルのヴェランダで、ゆくりなくも誰とも知らない  
一人の青年を見初めてしまいました。——これは日頃の彼女に  
してみれば非常に珍しいことで、しかもその青年はちつとも美青  
年でもなんでもなくて、むしろうち見たところひどく不器用な感

じじかない男なのですが、そんな点がいつそ却って彼女の心をひいたのかも知れません。

\*

彼女と青年とはよく申し合せたようにヴェランダで一緒になりました。それもたいてい他に人目のない時が多かったのです。

（あの人がもしちよつと後を振向いてそしてあたしを恋していると言いつてくれたらば——）と彼女は思うのでした。（……でも結婚なんてあたし厭だわ。弟ならいいわ。あんた、あたしの亡くなった弟とそっくりなんですもの……とそういおうかしら——）

青年とても、屹度彼女に恋しているのに違いありません。その証拠には、青年は殊の外なる臆病者と見えて、彼女とそこで顔を

合わせるや、いつでも真赤になつて、そつぽ向いて、ひたすら海や松林の景色なぞ、あらぬ方ばかりを眺めるのです。

もしかして自分が世にも名高い女優であることを、このあざらしのように内気な青年は知らないのではあるまいかと疑つてもみるのですが、いつか海岸で恰度青年がしやがんでいた砂の上に彼女の名前が大きく書かれてあるのを見かけたことさえあつたし、そんな道理はない筈です。——彼女は華きやしや車な両肩がぴんと尖つた更紗模様の古風な上衣を着て、行儀よくいずまいしたまま、青年の後姿を腹立しげに睨むより仕方がありませんでした。

\*

彼女は、なんとかして青年と近づきになれるような大きなきつ

かけを作ろうと思ひました。そこで、彼女は青年が泳ぎに行くよ  
うな時を見計らつて、彼女も海へ行つて、青年の泳いでいる付近  
で溺れて助けて貰おうかと考えたのですが、その計画は実行され  
るに至りませんでした。青年は泳ぎが非常にまずくて、殆ど腰ほ  
どの深さのところばかりに立っているのに、彼女は五哩マイル遠泳位は  
やれそんな腕前なのでしたから。

青年は、砂の上に寝ころんで、はるかに、赤と青とのだんだら  
縞の水着を着た彼女のか細い腕が、抜き手を切つて波と戯れてい  
るのを、不思議そうに見物していました。

\*

「——失礼ですが、お嬢さん……」

到頭、それでも、或る晩のことヴェランダで青年の方から、こ  
う彼女へ声をかけました。

\*

「——失礼ですが、お嬢さん。……あなたに、もしや、お兄さん  
が一人おありになりはしませんでしたらうか？……」内気な青年  
は、極めておどおどとして口籠りながらそういいました。

「兄　兄があつたかとおっしゃるのでございますか。ございま  
したわ！　ええ、ええ。それは非常に優しい兄が一人ございま  
た……」と彼女は、びっくりしながらも、喜び勇んでそう答えま  
した。

「そうですか。それで、そのお兄さん、今は御一緒にはいらつし

やらないのですか？——」

「はあ、——もう、別れ別れになりましたから——そうでござい  
ますね、かれこれ十五年にもなろうかと存じます。何分私なぞま  
だあまり幼い時分のことだったものでございませし、一体どんな  
ひどい家庭の事情があつたものでございませし、その後誰も聞  
かせてくれるものもございませし、今もつて全く判らないので  
ございませし。……ですが、その兄が、どうかしたのでございま  
すか？」彼女は顔を輝かしてそうきき返しました。

「十五年？——そんなに経ってしまったのでは、もうまるでおも  
かげさえもおぼえてはいらつしやらないかも知れませぬ。……  
いや、実は、あんまりはつきりとしたことを最初からお受合います



るわけにもまいらないのですが、少しばかり友達から聞かされたので……」

「とおっしゃいますと——あの、兄らしいものでも、どこかにいるのでございましょうかしら？」

「まあ、そうなのです。詳しいことを申し上げないとわかりませんが、……大分へんな話なのですよ。それできつと御信用なさらないだろうと思うのですけど。」

「信用いたしますわ……どんなことだって。」

「実は、お驚きになってはいけませんよ、あなたのお兄さんはずっと前からあなたの芝居をあなたとは知らずに始終観に行っていたのです……」

「まあ！……でも、無理ありませんわ。十五年もあわずにいて、しかも舞台顔で、名前までまるつきり変って別の名前なのでございますからね。それに兄だって、まさか私がこんな職業の女になつていようとは、それこそ夢にも考えてみもしませんでしたろうし……」

「ええ、全くそうなのです。兄さんは、あなたと別れて以来、いい具合にもそんなに不仕合せな目にも会わず、殊にこの頃ではお伽噺の作家として割合に評判もよくなって、殆ど不自由なく気ままな暮しをしています。やはり一日だってあなたの身の上を忘れることはなく、何とかして早く見つけ出して一緒になりたいと念じていたのでした。そんなにまで心にかけていながら、兄さん

としたことが、あなたの舞台姿を見て、親身の妹の幼顔を思い出すことが出来なかったばかりでなく、——実に怪しからんことにも、あなたにひどく恋してしまつたのです。その恋のためには身も世もなくなるほどの気持でしてね……」

「まあ……」女優は全くうろたえてしまいました。

「で、ぜひとも結婚しなければ、……命にかけても結婚すると堅く心に誓つたのですが、それほど思い詰めていたにも拘らず、あなたの兄さんと来たら、お話にならない位気の弱い人でしてね、どうしてもその心のたけをば、あなたに会つて打あける勇気が出なかつたものです。そこで、兄さんのごく親しい友達の一人がえらばれて、代つてあなたのところへそのことの話をつけるために

出かけて行くことになりました……」青年は言葉をちよつと途切らして、さて溜息を洩らしました。

「では、そのお友達というのが、あなたでいらつしやいますの？  
——でも、あなた、ちつともお困りになることはございませんわ  
……」

女優は感動しながら、やさしくそういいました。

「いやいや、違います。そうではありません。……困ったことと  
いうのは、そのえらばれた友達が、よせばいいのに、といったと  
ころでいつかは知れるには相違ないことなのですが、あなたへお  
話する前に、責任を感じたものとみえて、私立探偵に頼んで、あ  
なたの身元をしらべ、その序に兄さんの方も調べてみてもらつた

ところが、凶らずもこの二人は元々一本の幹から出たもので、兄さんはどうやらあなたの真実の兄であるらしいということが判つたのです。——さあ、そうなってみると、その友達は途方に暮れてしまいました。なぜといつてもそんなことをうっかり兄さんに打ち明けようものなら、兄さんは失望のあまり、人生を呪つて必ずや我身を亡ぼしてしまうに違いないと思つたからです。いつそ、何もわからずに、知らないまんまで、兄と妹とがやみくもにうまく結婚してしまえば何事もなかつたろうが、と今更悔んでも追つつきません。到頭その友達は可哀相なことにも、自責の念に堪えかねて、或る夜のことどこかへ逃亡してそれつきり行方も判らなくなつてしまつたような始末です。」

「……………」

「けれども、一旦私立探偵がそうと嗅ぎつけた以上、たといその友達が姿をくらましたにせよ、そんなことをすればするだけ、いつまでもその秘密が洩れないで済む道理がありません。——或る晩、倶楽部で酔っぱらいの友達同士が、声高らかにその内しよ話をしゃべっているのを私は——そうです、私は、聞いてしまいました。もちろん私たるものの驚きはたとえるものもありません。一体こんな残酷な運命の悪戯を、果してわれわれはそのまま許容してしまっても差問えないものであろうかと、私は嘆き、悲しみ、憤りました。だが、いずれにしても、こうした事実はお互のために極めて判然とさせなければならぬと考えまして、それ以来あ

らためて自分の手でいろいろ調査をしてみました。そして到頭、今朝になって、その動かすべからざる調査の結果を知り得たのです……」

「え！　なんでごぎいますって　それでは、あなたは、もしや……」女優は感激のあまり頭を抑えて立ち上がりました。「若しや……あなたがそのお兄さんではないのですか？……」

「そう、そう……ですけれども、ああ、それが、それが……」青年はすっかり胸をつまらせて、息苦しそうにどもりました。

「まあ！——」女優は、いきなり青年の肩をしつかりとかき抱いて、幾度も幾度も接吻しながらさして小さい声で囁くようにこういいました。「まあ！——嘘吐き！　あんたって人はなんて嘘吐き

なの！ あたしには、兄さんなんて、厄介な者はたった一人だつてありやしなくつてよ！……」

青年は抱かれながら、おろおろ声で弁解しました。

「だって僕は、——僕のいおうとしたのは、その調査の結果が、やっぱり僕とあなたとは兄妹ではなくて、その友達が自分も同じようにあなたを好きだったので、そんな出鱈目を捏造したままであるということなのです……」

「ばか！ まだそんなことをいつているの！」

女優は、そしてまるで楽しいピアノのような音を立てて笑い、ずれました。

\*



女優とその童話作家だという青年とは、それから間もなく結婚して仕合せに暮しました。



# 青空文庫情報

底本：「アンドロギュノスの裔」 薔薇十字社

1970（昭和45）年9月1日初版発行

初出：「サンデー毎日」

1927（昭和2）年7月

入力：もりみつじゅんじ

校正：田尻幹二

1999年1月27日公開

2003年10月17日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 恋

渡辺温

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>